

第9回目（1993年12月4日放送）

【いろはがるた】

「良薬は口に苦し」: Good medicine tastes bitter.

【話の内容】

あと3日で忘れられない真珠湾の日がやってくる。ホノルルは真珠湾攻撃を目の当たりにした。しかし、ホノルルから飛行機で40分かかるヒロでは、70パーセントの人が演習だと疑わず、まさか戦争だとは夢にも思わなかった。大久保は7時に子どもと一緒に洗濯物を取りに行った時に開戦のニュースを聞いた。ガソリンスタンドに立ち寄った後、日本人商工会議所二階で会議を開いたが、10人中7人が演習だったと思った。

ボルケーノに住んでいた椰子島日本語学校の永倉永造先生、ハワイ日本人商工会議所書記の落合恵吉(ともに静岡県出身)がその晩に逮捕され、ボルケーノ兵舎を収容所にしたところに連れて行かれた。大久保もそこに入れられた。

開戦に伴い、ハワイ島の軍政法において、次のことが決められた。ラジオの音を大きくするな。12月7日発の汽船および飛行機の運航取りやめ。自動車での外出禁止。路上駐車禁止。電話を控えるように。火をたくことを控えるように。外国語放送(日本語放送)は中止。ヒロ飛行場付近への立ち入り禁止。ヒロ病院への見舞い禁止。

12月8日付のハワイ毎日では政府当局の発表を報じている。内容は、第24号法案の実施についてであった。まずは学校の休校、ついでガソリンの販売の中止。全ての外国人はおとなしくして、仕事をしろというものであった。

また、日本人の一般同胞への注意として、どれだけ食べ物の備蓄があるか報告すること。できるだけ車に乗らずに歩くこと。食べ物一切は、商工会議所に相談してからもらうようにすることというものである。注意事項の内容は島によって様々であった。

大久保は12月7日の12時に逮捕された。日本語放送をしながら新聞記者をしていた大久保は、火をつけてご飯を家族と食べていたところ、ロシア系アメリカ人が火を消せと言った。そして、ロサンゼルスラジオ放送をつけたところ、「大統領が太平洋沿岸の日本人3000人を監禁、抑留する」と言っているのを聞き、ネクタイ、コートを着け、自分のところにもくるかなと思って待っていた。すると12時に警官が大久保のもとに来た。警官は、大久保が準備をして待っていたことに驚いたという。機関銃を持った警官にカピオラニスクールで身体検査をされ、雨が降る中、収容所へ連れて行かれた。

「ハワイ報知」の矢野茂(熊本出身)は、アメリカの抑留所へいったときに腹が立った話があるという。「子犬が来た子犬が来た、大犬は来んが、子犬が来た」と他の人から言われたという。大犬とは牧野金三郎(ハワイ報知社長)、子犬はその部下であ

る矢野のことである。ハワイ報知から引っ張られた人は少なく、「日布時事」の方が多かった。牧野は特にひっぱられなかったので、「ハワイ報知」はイヌ(アメリカのイヌ)と呼ばれた。大久保は 39 日後に監視付で抑留所から解放された。その直後にハワイ報知で牧野の側近であった熊崎熊一から、手紙が来た。内容は、「大久保が出られたのは、牧野社長の尽力によることを忘れないで欲しい。現在、新聞を発行しているのは、軍部の要望であり、英語を解せない1世のために行っているが、費用面は厳しく、軍部が責任を持って便宜を図ってくれることになっている。各島に支局員がいないと不便ということで大久保が解放された。牧野社長も大久保に一層活動して欲しいと考えており、もしできない理由があれば軍部に伝え、島の司令官に手紙を出して、やりやすいようにする。ヒロ市の読者の募集も頼む」というものであった。

しかし、実際のところ、新聞は、軍が検閲しているので、いい新聞ではなかった。また、新聞をとってくれと行ったところが翌日引っ張られるようなこともあった。

戦争よりも日本人の気持ちは反米ではないということをはっきりと言いたい。

【曲】

「二世行進曲」(作詞・作曲:古賀政男)

【サブジェクトタグ】

第二次世界大戦 真珠湾攻撃 強制収容・退去 戒厳令 戦時の暮らし 新聞記者
キラウエア米軍基地(抑留所) 牧野金三郎